

日本と英国の絆を結ぶ えびす



英国の バイオテクノロジーネットワークへのアクセス 外部研究機関を活用したより強力なパイプラインの構築

製薬会社やヘルスケア会社は、近年自社の開発パイプラインを補強するため、あるいは製品の品揃えを増やすために外部との提携に強く依存するようになった。

製薬会社においては商業利益面から後期臨床開発段階（後期第Ⅱ相あるいは第Ⅲ相）でのパートナーリングは既に一般化され、近年ではより早い段階（前臨床あるいはリードオプティマイゼーション段階）での開発品目を導入することにより自社のパイプラインの強化を図り開発におけるリスクの低減と開発経費の削減に取り組み始めている。

同様に、ヘルスケア会社においても革新的な医療機器やヘルスケア商品を規模の小さいバイオテクノロジー会社から早い段階で導入することにより、新製品の開発が自社開発品に比ベコスト優位性があると理解され積極的に行われるようになった。

このような戦略を取り入れたい日本の製薬会社にとっては、バイオテクノロジー分野での革新的かつトランスレーショナルリサーチに強い海外に目を向けることになる。

英国バイオテック、大学と研究機関

英国はこの分野でのリーダーである。そのバイオテックセクターは、実績のある大学や寄付により設立された研究機関がトランスレーショナルリサーチを牽引し、革新的な先端技術と複雑な開発段階の隙間を埋めている。

バイオテック

近年ではバイオテック企業であるドマンティス社（Domantis ; MRCからのスピニアウトdomain antibodies）とピラメッド社（Piramed ; PI3 Kinase）がそれぞれGSK社とロッシュ社により買収された。

同様にアステックス社（Astex）は大手製薬会社と提携を行い、更に新しいヘプタレス社（Heptares ; focused on GPCRs）が設立されつつある。



ヘルスケア領域では、バースコントロール分野で事業展開するデュオフェルティリティ社（DuoFertility）が革新的な開発を行っている。現在、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドには数百のバイオテック企業が存在し、その多くはケンブリッジ、オクスフォード、ロンドンで囲まれた三角地帯周辺に拠点を置いている。

大学と研究機関

大学や研究機関はつねに新しい革新的な会社の芽生えを手助けしてきた。グローバルな研究開

日本と英国の絆を結ぶえびす

発戦略がアウトソーシング型に推移する中、経験豊富な製薬会社の研究者や開発担当者、ヘルスケア産業における発明者などは基礎研究の製品化に向けたトランスレーショナルリサーチを行う目的で企業から英国の大学や研究機関に集まって来た。これは新しく刺激的な潮流である。

最も高い売り上げを誇る片頭痛治療薬ゾルミトリプタン (zolmitriptan ; Zomig®) の発明者で、現在もその発明の幾つかが臨床開発段階にあるロバートグレン教授 (Prof. Robert Glen) は米国のバイオテック企業2社に勤務後ケンブリッジ大学に戻り現在同大学の理学部化学科教授の職にある。現在同氏は循環器系薬剤の創薬研究に従事している。

ダンディー大学での新しい医薬情報学部の教授はファイザー製薬に在籍していた著名な研究者のアンドリューホプキンス (Andrew Hopkins) である、彼はクリスリピンスキー (Chris Lipinski) とともに *drugability* に関する研究を出版したことで知られている。

なぜこれらの人々は大学に戻って来ているのでしょうか？一言でいえば、彼らが最も得意とする分野である製薬またはヘルスケアにおける研究を共同で、効率よく行い、研究開発の成果を素早く出せる環境が大学にあるからなのです。

大学との提携

更にこのような変化は大学で複雑化するトランスレーショナルリサーチ分野のコラボレーションの仕方からも窺うことができる。ダンディー大学では、サーフィリップコーエン (Sir. Philip Cohen) により率いられているキナーゼとフォスファターゼの研究に国が1000万ポンドを投入、そのプロジェクトにはアストラゼネカ、ベーリンガーインゲルハイム、グラクソスミスクライン、メルクーセロノ、とファイザーが関与している。

同様にケンブリッジでは、英国癌研究所が新たに癌研究のための研究機関を、ケンブリッジ大学生物医学キャンパス内のアッデンブルックス病院に隣接する場所に設立し、研究内容をベンチから患者までのトランスレーションを行える体制が出来上がっている。

2008年の状況

製薬会社やヘルスケア会社にとって英国で提携先を探すのにこれほど良い時は今までありませんでした。

- ・ 製薬会社から来たシニアな研究者が現在教授などのポジションにつき、革新的なヘルスケアをターゲットとするプロジェクトを行っています。
- ・ バイオテック企業はVCによる追加投資を受ける前の開発初期でのパートナーリングを期待しています。
- ・ この分野ではVCによるファンドが不足しているため、既に商業化を目指した投資を待っている革新的なプロジェクトが多数存在します。

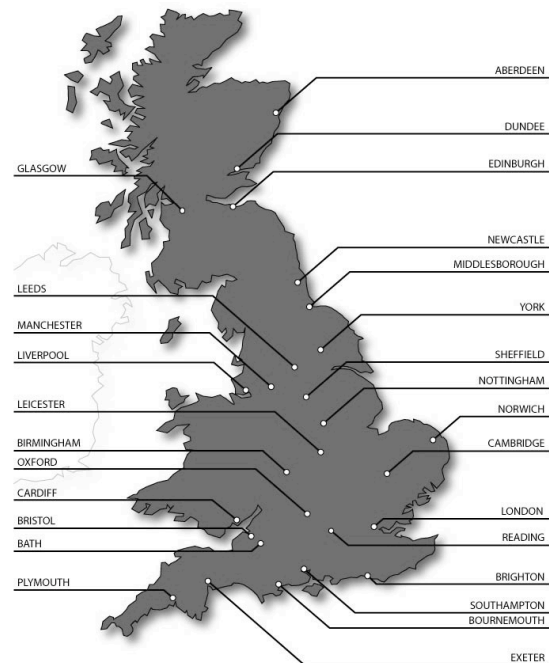
このことにより従来の提携条件よりも良い条件で製薬会社がプロジェクトを導入する可能性が生じています。

我々の提案

我々は、英国で研究委託、パートナーリング、プロジェクトの開始、製商品の導入などの機会をご検討中の日本の製薬会社の代理として業務を行うことを目的に会社を設立しました。

我々は独自に:

- ・ ケンブリッジ大学やオクスフォード大学はもとより、イングランド、スコットランド、ウェールズと北アイルランドに本拠地のある幅広いバイオテック会社、大学や研究機関をカバーすることができます。
- ・ 一般に知られる前のプロジェクトをご提供できます。



日本と英国の絆を結ぶ **えびす**

- 貴社に代わってアカデミックの専門家を集め、医薬品開発の経験のあるプロジェクトマネジメントを手配して、特別なプロジェクトの立ち上げを行うことも可能です。
- 外部委託プロジェクトのプランニングおよび管理を行い、主要なマイルストーンとして例えば、開発候補品の選定、非臨床段階、フェーズ I 試験段階までプロジェクトを進めることが可能です。
- 市販の化学合成や分析手法とアカデミックの専門知識を合わせ提供できます（ケーススタディ参照）。
- 知的財産権の保護を確保します。

我々の強みとしては:

- 貴社を代表し貴社のために働くことができます。
- 英国の研究者と日本の製薬会社にネットワークを持っています、言葉の違いや国の違いの懸け橋となることが可能です。
- 製薬会社とバイオテック会社の両方で働いた経験からそれぞれの会社の経済的な状況を理解しています。
- 日本で日本の製薬会社で働いた経験から日本の製薬会社の習慣についても理解をしています。
- バイリンガルであり、日本人スタッフは英語に精通、英国スタッフは日本語に精通しています。

スタッフ紹介

マーク・スウィンデル (Mark Swindells) : 1992-1998年の7年間、日本に在住。その内の4年間は山之内製薬株式会社（現、アステラス製薬株式会社）に初めての外国人研究者として勤務。その後、ロンドンにバイオベンチャーを設立し4000万ポンドの投資を受け、日本語の能力を生かして日本の製薬会社や研究機関との取引を成立させた。研究分野の関係者とのコンタクトを維持しながらも商業化にも興味を持つようになり現在に至る。

脇 豊 (Yutaka Waki) : 主に協和発酵工業（現在は協和発酵キリン）にて臨床開発を担当、1998-2003年米国の子会社（ニューヨークとプリンストン）にて国際開発担当副社長、6年間で米国で過ごし、臨床試験を現地でマネージした。2006年に退社するまでは本社にて国際開発コーディネーション担当部長。その後、2006-2008年はVC投資により設立された数少ない日本のバイオベンチャーである照隅ファルマ株式会社にて開発部長。2008年コンサルティング会社であるポイントパストットビズを設立し現在に至る。

ビジネスモデル

クライアントのニーズに合わせて業務受託は、委託業務契約（リテーナー）にて英国での進捗状況を随時報告する方法、または目的物を探すプロジェクトベースの契約方法が可能です。

費用構成としては、見積もり期間（作業量）に見合う報酬と成果物が得られた時点で支払われる成功報酬となります。

クライアントにより目的が異なるため、我々はクライアントの要請に柔軟に対応いたします。

コンタクト

日本国内からのコンタクトは**脇豊**（ポイントパストットビズ株式会社）がお受けいたします。

ポイントパストットビズ株式会社 〒225-0002横浜市青葉区美しが丘2-21-9-504
contact@ppbiz.jp 090-9109-0452

日本以外からのコンタクトはマーク・スウィンデルス宛に、

えびす 12 High St, Easton-on-the-Hill, PE9 3LR 英国
www.ebisu.co.uk enquiries@ebisu.co.uk +44 1780 762 259